
人生《ストーリー》は終わらないっ！ 1

ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリー
人生は終わらないっ！ 1

【Nコード】

N8080Y

【作者名】

ひなた

【あらすじ】

『ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた……』
それは、かつて少年がテストの裏に書いた物語の序章。
時が経ち、彼はその物語の存在すら忘れていた。
しかし、彼は思わぬ形で忘れていた物語と再会する。

漢字テストの裏の序章

ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた。ぼくはそのネコに『ハク』という名前をつけた。初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛が、あんまりにもキレイだったからだ。ハクは、すばしっこそうなスラリとした体に、いたずらっ子みたいなキラキラしたひとみをしていた。ぼくはハクの身の軽さや、ひとみのがやきにとてもおどろいた。でも、ぼくが一番おどろいたのは、ハクの毛並みの白さでも、すばしっこさでも、ひとみのキラメキでもない。

ハクは人の言葉をしゃべるネコだったのだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す (1)

「これは何だ……？ ……ああ、数学のノートか。これはもう見たくないな。廃品回収行き……つと」

オレは手にしたノートをポイと放り投げた。くたびれた数学のノートは、緩い放物線を描いて部屋の隅に無事に着地した。

オレはノートの着地を見届け、小さくガッツポーズをした。よし、狙い通りだ。

「さて、次は……ん？ これは世界史のプリントか。……もうグシヤグシヤだな。これは廃品回収より……燃えるごみにした方が楽かな」

そうつぶやきながら机の横のゴミ袋を引き寄せて、世界史プリントを束ごと突っ込んだ。プリントは情けない音を立てて潰れる。こんなの先生が見たら泣くだろうなあ。先生が苦労して作った3年間の授業プリントも、ゴミ袋の中じゃ惨めなもんだ。

「許せ、先生。オレの部屋の美化のためだ」

オレは慰めるように、ゴミ袋を2、3度叩いた。

「えーと次は……」

その時だ。オレの背後のドアが派手な音とともに、吹っ飛びそうな勢いで開かれた。このドアの開け方は ああ、アイツがおいでなさったか。

「ちよつと、海人^{カイト}！ 何をさつきからブツブツブツッ！ うるさいわよ！」

女性特有のキンキンする高い声。いつものことながら、耳に突き刺さりそうなの声は慣れない。オレはげんなりとドアの方に目を向ける。そこには仁王立ちになった大柄な女性のシルエットが1つ。まさに予想通り。オレは小さくため息をついた。

「ねーちゃん、勝手にオレの部屋に来るなよ」

そこにいるのはオレのねーちゃん

たまむら 玉村

ミナミ 美波。

幼いころからオレ達姉弟は、いろんな人に「姉弟なのに、全然似てないのね」って言われてきた。……うん。オレもそう思うよ。

小柄でひよろいオレと違って、ねーちゃんは背が高く大柄で、いつも声大きい。なんでも、この体格と声で、学生時代はバレーボール部で重宝される選手だったそうさ。くりつとした大きな瞳をキラキラさせながら（オレがうんざりするぐらい）ねーちゃんは語っていた。

オレ達の唯一の共通点は、サラサラストレートの黒髪だけ。でも、それはもう過去の話。社会人になった今のねーちゃんの髪は、緩いウェーブのかかった茶色のショートヘアに変わってるから。

オレは18年間で1度も変わってない黒髪頭を掻いた。さて、どーやってねーちゃんに退出してもらおうか。

どうやら今、ねーちゃんのご機嫌はあまりよろしくないらしい。ねーちゃんのくりつとした瞳が、きゅっと細くなってつり上がった。よくない前触れ。おい、ねーちゃん。いつも「もつとパツチリした目がいい」ってグチってるじゃん。そんな目、やめた方がいいと思うよ。

でも、健気な弟の無言のアドバイスは届かなかった。

「で？ どれぐらい片付いたのよ？」

ねーちゃんは細くつり上がった瞳で、オレの部屋をずっと見回した。一瞬、カチンとくるものがあつたが、オレは1つため息をついて我慢することにした。こんな眼をした時のねーちゃんを阻止して、よかつた例ためしがない。オレは学習する子なのだ。

部屋の状態は一言で例えるなら、……足の踏み場もないってところだろうか。

床の上には、教科書の塔やマンガのタワーが、そこかしこに建築されている。今にも崩れそうな危うい状態だ。誰だよ、こんな危な

いものを建てたのは？ …… あ、オレか。

ベッドの上には洗濯物がこんもりとした山を作っている。本来ならクローゼットに仕舞われるべきものなのだが、どうにも面倒くさいのだ。

勉強机の上は、ペンやらプリントやらファイルやらでいっぱいだ。ちよつとでもつついたら、あつという間に崩れてしまいそうだ。こんな状態でも崩れてないのが不思議だよな。まるで表面張力でも働いてるみたいだ。

「うーん、汚いままね。全然片付いてないわね」

ねーちゃんの言うように、全然片付いてない。 …… …… …… むしろ余計に汚くなつたかな？ しかし、ねーちゃんの前でそれを認めるのは癪だ。

「しょうがないだろ。部屋の掃除と、荷物の整理と、下宿用の荷づくりと、いつペンにしているんだから …… 」

「あーもう！ ボソボソ言わない！ 独り言多すぎ！ 部屋の片づけぐらい静かにできないの？」

「それ、もう聞き飽きた。オレの独り言はクセなんだよ」

とりあえず、ねーちゃんはもうほつとこころ。片づけ再開、再開。手近にあった生物の教科書を、数学のノートのそばに放り投げる。

「そんな調子でほんとに片付くの？ 3日後には下宿先に引越すんでしょ？」

「あーもう、うっさいなあ …… 」

「つてか、海人。これから1人暮らしなのに、ホントにやってけるの？ 自分の部屋でさえこんな状態でさ」

「だから今片づけてるじゃんか。もう出て行って」

「 …… ハイハイ」

ねーちゃんは呆れたように言うと、部屋から出て行った。

やっと静かになった。オレは安堵のため息をついた。

「ちよつと休憩 …… 」

オレは荒れきつた部屋のフローリングにゴロンと横たわる。ねー

ちゃんの相手は疲れるのだ。

天井に反射するほのかに暖かい日の光が、静かになったオレの部屋をやわらかく照らし出している。窓の隙間から、庭の草花のかすかな匂いがする。窓の外は春爛漫つてところなんだろう。

そういえば、今朝のニユースのお天気おねーさんが『今日は絶好のお花見日和のお天気です』つて言ってたな。

「つても、今年の春休みはそんな暇ないけどな……」

ほんの2、3年前の春休みは友達とダラダラ過ごしたり、1人で本やらマンガやらを読んだりして、のんびりと過ごしていたっけなでも、そんな日々は高校3年目に一変した。特に受験と卒業が近づくと、クラスの緊張感は一気に高まった。

「今思えばオレ、あんなピリピリした環境でよくやってけたよな……」

ともかく、オレは数週間前に無事に高校を卒業。進学先の大学も決まった。遅いながらも、今年も自由な春休みを謳歌……しているハズだった。

でも……

「……『3日後には下宿先でしょ』か。明日は家具の引っ越しだし……」

受験終了直後にこんなありさまだ。とてもものんびりした春休み、という状態じゃない。

不意に、ねーちゃんのキンキン声が脳裏によみがえる。

『これから一人暮らしなのに、ホントにやってけるの?』

「ホント昔からおせっかいだなあ……わざわざそんなこと言つなよ……」

オレはあと3日で、生まれてこの方18年間住み続けたこの家を出て、下宿暮らしを始める。通学には無理のある隣の県の大学に進

学するからだ。そんなわけで、この春休みはのんびり過ごす暇もなく、部屋の片付けやら、下宿の準備やらにいそしむ羽目になっている。『立つ鳥跡を濁さず』ってわけだ。

「しかしこの部屋の掃除……いつまでかかるんだろ……」

掃除作業のゴールが見えない。そりゃ3年間、ろくに掃除をしなかったから、時間がかかるとは思ってたけど。さすがのオレも、朝から昼過ぎまでずーっと片づけをしてると、ウサもたまるってもんだ。

「……ああもうっ！」

思わず振り上げたオレの拳が床を叩き、ドスッと音を立てる。

それが大きな間違いだった。

床に叩きつけられた拳は、オレの予想以上の衝撃を生み出したらしい。オレが「しまった」と思った瞬間にはもう、教科書の塔がぐらついていた。

く、崩れる！

塔が傾いていく。ただでさえ足の踏み場もない状態なのに、これ以上散らかると敵わない。オレは夢中で塔に手をのばす。

スローモーション。じれったい一瞬の後、オレの手が崩壊寸前の教科書の塔を支えた。よし！これで塔の崩壊は阻止できたぞ！

その瞬間だった。

ドサドサドサドサ……それは頭の上に滝のように落ちて来るプリント。

オレの伸ばした手は塔を支えるにとどまらず、勉強机にも届いてしまっていたらしい。奇跡のようなバランスで均衡を保っていた机の上のプリントたちは、オレの手が激突した衝撃であっけなく崩壊した。

プリントの滝がおさまると、勉強机の上はずいぶんすっきりした。代わりに、部屋にはプリントの海が現れていた。所々に小島のように

に教科書の塔やマンガタワーが頭を覗かせている。

さて、ここで問題。オレはどこから手をつければいいんでしょうか？

「とりあえずこっちはほっとこつ……気を取り直してクローゼットから片づけるか……」

オレは勉強机に背を向けて、クローゼットの取っ手に手をかけた。思い切つて一気にクローゼットを引き開ける。

これも間違いだったらしい。

声を上げる暇も無く、オレは突如現れたガラクタの雪崩に飲み込まれた。

……もう、オレにどうしろって言つんだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す (2)

机のまわりに散らばるプリントを海に例えるなら、クローゼットの中から溢れ出したゲーム機や服なんかのガラクタどもは堤防だろうか。プリント海の拡大を防ぐ堤防だ。

オレとしては、海も堤防も撤去したいんだけど。というか、海だけでも十分手に負えないのに、堤防まで出現するとは。状況は悪化するばかりだ。これじゃ掃除をしているのか、部屋を荒らしているのか自分でもわからない。

思わず深いため息が漏れた。もう独り言を言う元気もない。とはいえ、3日後には家を出る以上、片づけなくては。

「とりあえず、クローゼットの片づけ、片づけ……っ」と

オレはガラクタ堤防を乗り越え、クローゼットに近づいて 盛大にくしゃみをした。

「うえええ……すっげーホコリ……!!」

自分のクローゼットながら、我慢の限界を超えるホコリの量だ。

とりあえず窓際へ撤退だ。鼻をかみ、2、3度深呼吸。新鮮な空気を十分に吸い込んで オレは息を止めてクローゼットに首を突っ込んだ。

一度崩壊して、物が溢れ出したせいだろうか、クローゼットの中はわりとすっきりしている。(もちろん、クローゼットの外と比較してという条件付きで、だ)

「あれ……? これ……」

オレはクローゼットの奥の方から1つの段ボール箱を引っ張り出した。それはどこから見てもごく普通の段ボール箱だ。多分、スーパリーの「ご自由にお持ちください」コーナーから持ってきたんだろう。大きさは、幼稚園児が2人でお風呂ごっこができそうなくらい。ふと目についたその段ボールにオレは……何か見覚えがある。

「もしかしてこれ……『ブラックホール』か？」

『ブラックホール』。

それは昔、オレがこの段ボール箱につけた名前だ。

捨てられないけど、普段は使わない物。捨てずに取っておかなければならない物。とりあえず見えない所に押しこめて置きたい物。そういったものを、オレはこのブラックホールに片づけて……まさに臭い物に蓋……といったかんじで。オレは普段、このブラックホールの存在には近づかないようにしている。というか、忘れたことにしている。あんまり直視したくないものじゃないし。

とはいえ、これも片づけないと、きつと怒られるんだろうな。

オレは半ばヤケクソ気味にブラックホールの封印を解いた。

ブラックホールの中身は悲惨そのものだった。くしゃくしゃの文集。ぼろぼろのノート数冊。壊れたシャーペン。まだ使えそうなグローブ。子供用のスパイク。使いさしの絵筆。何のために捨てずにとつてあるのかわからない物ばかりが、ブラックホールの中でごちゃまぜになっている。もはや、そのままゴミ箱として使ってもいいかもしれない。

「こいつも整理しろって？……骨より心が折れそうだよ……」

オレは絶望的な気分でブラックホールに手を突っ込んだ。やけっぱちで適当に手に触れた物をひっぱりだす。

現れたのはシワシワのプリントの束だった。オレはシワをのばしてプリントの束をめぐり始めた。どうやら漢字テストの束らしい。問題の内容からして、小学生もしくは中学生の時のテストだろう。「うあ、ひつで 点数ばっかだな」

10点満点中のテストで2点やら4点やら、残念な点数ばかりである。うーん、ヒドイ。そして、点数もヒドイが間違いい方もヒドイ。例えばコレ。『初雪』の読みを答える、という問題。オレの回答欄には『しよせつ』としっかりとした濃い文字。……自信満々に書いて

であるのが余計に恥ずかしい。

「あー……情けない……」

オレは逃げるようにそのテストを裏返した。

「あれ？ 何だこれ？」

『しよせつ』テストの裏に何か書いてある。テスト用紙の裏の隅に隠れるように書いてある文字の列。小さいがテストと同じような、しつかりした濃い文字だ。

「なにになに……」ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた……
「……？ なんだこりゃ？」

最初は日記かと思ったが、どうもそうじゃないらしい。最後まで読むと猛烈に恥ずかしくなった。コレ、オレが書いたのか？ ……オレのテストの裏にあるんだから、きつとそうなんだろうな。これだからガキの想像つてのは……。

恥ずかしさに我慢できなくなったオレは『しよせつ』テストを乱暴にブラックホールに突っ込んだ。

「イテッ」

断つとくけど、これはオレの独り言じゃない。だってオレ、どこも痛くないし。

じゃ、痛いのは誰だ？ さっきの声はどこから聞こえた？ 常識で考えると

「ねーちゃんかな？」

今、この部屋にいるのはオレだけだ。つまり、この部屋で言葉を発するのは、オレとテレビぐらいしかいないはず。しかもテレビは現在オフのままだ。と、いうことは、さっきの声はこの部屋の外から聞こえてきたことになる。

「まったく、ねーちゃんこそ静かにしろっての。さて片づけ、片づけ……」

オレは再びブラックホールに手を突っ込んで、適当に中を探り始めた。

漢字テスト…… 文集…… 絵筆……。ガサガサと大げさな音を立て

ながら、いろんなガラクタが見えたり隠れたりをくり返す。まるでかくれんぼをしているみたいだ、なんて思ってるよ

「イテツ」

またあの声だ！ オレは反射的にブラックホールから手を引っこ抜いた。

「なんだっ？」

オレの独り言の声が上がっている。完全にビビってるぞ、オレ。でも、それもしようがないと思う。さっきと同じ声が、オレのブラックホールの中から聞こえてくるんだから。これは聞き間違いや、空耳なんかじゃない。こんな至近距離から聞こえてくるんだぞ。間違えようがないじゃないか。

この中に一体何が入ってるんだ！？ オレはそーっとブラックホールを覗きこもうと、腰を落とす。

突然、ガタガタと脅すような音を立ててブラックホールが震えだした。まるで中身が大暴れしているみたいだ。

「うわあああああああああ！？」

オレは恥も外聞も捨てて大声で叫ぶと、ブラックホールから飛びのいた。

と、始まった時と同じように突然ブラックホールがピタリと動きを止めた。今まで大暴れしていたのがウソのようだ。

「……何なんだ………？」

オレはへっぴり腰でブラックホールに近づく。そして、再びブラックホールを覗きこもうとして

「へぶっ！？」

オレは今まで出したことも無いようなうめき声を上げて、床にひっくり返った。

なにせ、白い毛の塊がいきなり顔面に直撃したんだぞ？ 鼻は痛いし、視界が白い毛で埋まって何も見えないし、動物臭いし、たまったものではない。

「全く、自分の書いたものを粗末に扱いきりではないか？」

偉そうな口調。ブラックホールから聞こえてきた、あの声だ。床にひっくり返ったオレの顔の上から聞こえてくる。

後頭部が痛い。鼻も痛い。顔じゅうに毛の塊が乗っかっていて息が苦しい。さつきから訳がわからないことばかり。いろんなことが重なって、オレはイライラしていた。

「何なんださつきからあああああ！」

オレは湧きあがってきたイライラを全部まとめて爆発させた。怒りの標的は顔面の毛の塊だ。オレは腕をのばして顔面の毛の塊を薙ぎ払った。つもりだった。

「ごふっ!？」

オレが拳を振るった瞬間、顔面から毛の塊は消えた。それはまさに一瞬の出来事。「しまった」と思う暇もなかった。オレの拳は毛の塊ではなく、オレの顔面に直撃してしまったのだ。

結果、オレは顔を手で覆って床の上で悶絶する羽目になった。もはや声をあげる元気もない。なにせさつきから二回連続で顔面に物が直撃しているんだから。

「たわけめ。いつからお前はそんな暴力少年になってしまったのだ?」

またあのエラそうな声が聞こえる。

「どうなんだ? 玉村 たまむら 海人 カイト」

知らない声に、フルネームで呼ばれた。顔面はまだ痛いけど、声の主がどうしても気になる。オレは上半身を起こし、声のした方に顔を向けた。

とたんにオレは絶句した。

初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛。すばしっこそうなスラリとした体。いたずらっ子みたいなキラキラした瞳。眼の前にいるのはどう見ても

「ね……ネコ?」

かすれたオレの声が、荒れた部屋にかすかに響いた。

1、喋る白ネコは跡を濁す (3)

「ね……ネコ？」

オレの言葉に、目の前の白ネコの長いシツポがピクリとひきつった。

「私の名前は『ネコ？』ではない」

白ネコは偉そうな口調で言った。　　って、あれ？　今、白ネコ

が

「　　しゃ、喋った!？」

白ネコのシツポがまたピクンとひきつった。

「いいか、玉村^{たまむら} 海人^{カイト}！ 私の話ぐらいちゃんと　　」

間違いない。聞き間違いじゃない。コイツ、ネコなのに喋ってる。白ネコはペラペラと流暢に何事かを喋っているが、オレの耳はもうヤツの話なんか聞いちゃいなかった。

「　　ばバケネコだあああつ！」

オレの口から飛び出したのは、奇妙にかすれて裏返っている叫び声。叫んだところでどうなるか、なんて考えている余裕はオレの頭にはこれっぽっちも無かった。でも、オレの叫び声は確実にアイツを呼び寄せる原因となっていたようだ。

「　　だーかーらーっ！」

イライラ度100パーセントの大声。その声と共にドアの向こうからバタバタという騒々しい足音がする。

「掃除ぐらい静かにしろってーの！ このバカイト！」

壊れそうな勢いで開くオレの部屋のドア。オレは床に座り込んだままドアへ目を向ける。

そこにいるのはやつぱり　　！

「……ね、ねーちゃん……」

『バカイト』の呼び名が出た時点でわかっていたことだが、ねーちゃんのご機嫌は今、かなり悪いようだ。ちなみに、この『バカイト』という呼び名はオレには禁句。いつもなら『バカイト』と呼んだヤツとは、3日は口を聞かない。

でも今はそんなのどうでもいい！　こんな超常現象、1人じゃ手に負えないから！

「なあ、ねーちゃん！　見てくれよ、こいつ　」

オレは小さく震える指で目の前の白ネコを指差した。

「オイ。指差すなんて失礼だろ」

白ネコはオレの人差指を睨みながら唸るように言った。

「　っ！　なあ、聞いただろ！？」

オレは急いでねーちゃんの方に振り向いた。

目に入ったのは、驚愕の表情を浮かべたねーちゃん。それは予想通りなんだけど。なんで、ねーちゃんの眼がつり上がってんの？

もしかして怒ってる？　ここは普通、驚くとこじゃないか？

そして、ねーちゃんはオレを睨み付けて怒鳴った。

「なんでネコがあんたの部屋にいるのよ！？」

……え？　ねーちゃんが気にするポイントそこだけかよ！

「あ、イヤ、確かにオレの部屋にそいつがいるのも問題なんだけどさ、ほら、もつとこっつ……」

「うるさい！」

オレの必死の訴えはあっさり一蹴された。

「まったく、あんたは昔っからそうなのよ！　すぐ野良猫を拾ってきてー！」

ねーちゃんは、止める間もなくネコを抱え上げた。

びっくりしたのはオレと白ネコだ。待てよ！　そいつ、ただのネコじゃないんだぞ！

「コラ、女！　何をする！」

白ネコはスリムな体をよじって大暴れしている。なんとかかねーちゃんの腕から逃れようとしているんだらう。

「こら、おとなしくしなさい！」

ねーちゃんはネコを一喝した。喋るネコを目の前にしてこの落ち着きよう。……オレのねーちゃんは大物なのかもしれない。

「は、放せ！」

白ネコはウナギのようにねーちゃんの腕をすり抜けた。そしてひとつ飛びでオレの膝の上に着地。オレは内心その身軽さに舌を巻いた。体操選手の演技みたいだ。

「オイ、タマ。お前覚えてるだろうな？」

白ネコの顔がずっと近づいた。まるでにらめっこをしているみたいだ。

「へ？」

オレはネコの目に映る、自分の顔を眺めながら返事をした。乱れた黒髪の奥に困ったように隠れているオレの瞳が、オレ自身に問いかける。この白ネコ、一体何を言っているんだ？

「名前！ 私の名前だ！ タマ、わかってるだろう？」

癪に障るエラそうな口調。ついでに「タマ」って呼び名もイラつく。名字が『玉村』だから『タマ』。昔、友達から呼ばれてたあだ名だが、ネコにそんな名前で呼ばれるなんて、なんか屈辱だ。

「答えるタマあ！」

ネコの声に悲痛な色にじむ。同時にヤツの4本の足に力がこもり

「いってええええ！ オレの足いいい！」

「おっと。つい、爪を立ててしまった」

ズボン越しだから、出血騒ぎにはなっていないようだが、爪を立てられては敵わない。床の上で悶えるオレ。そんなオレを尻目に白ネコは優雅にオレの膝から飛び降りた。

その瞬間だ。

「捕まえたっ！」

ねーちゃんの腕が再びヤツを捕獲した。

「何っ?! くそっ! 放せというのに!」

「こら、ニヤーニヤーうるさい！」

ねーちゃんが白ネコに怒鳴った。

「……『ニヤーニヤーうるさい』？」

このセリフがきつかけだった。オレの頭が『何かがおかしい』と急に回転し始める。

あの白ネコ、「ニヤー」なんて言ったか？
違う。

あの白ネコはさっきからずっと人の言葉を喋っているのだ。「放せ」と。少なくとも、オレにはそう聞こえている。

「ちよつと海人。あんたのネコでしょ。コイツ、なんとかしなさいよ」

「タマ！ オイ、ボーっとすんな！ 助ける！」

ねーちゃんと白ネコと、同時にオレに話しかけてきた。

オレはゆつくりと顔を上げ、白ネコとねーちゃんを交互に見た。

ねーちゃん。コイツ、さっきからずっと人間の言葉を喋っているけど、気付かないか？

白ネコ。お前は一体何者だ？

頭の中でそれぞれに言いたいことが渦巻いている。でも、あまりにも非現実的で上手く言葉にならない。だからオレは、バカみたいに口を開いたり、閉じたりしていた。

「何なのよ、もう！」

使えないわねえ、とかなんとかつぶやきながら、ねーちゃんは大暴れする白ネコを連れて部屋を出ていった。

おい、ねーちゃん。立つ鳥跡を濁さず、だろ？ 跡が濁りすぎなんだけど？ オレ、わからないことだらけで、ぜんぜんすっきりしないんだけど？ どーすればいいんだ？

こんな状態じゃ、部屋は当分片付きそうにない。

2、腹が減っても戦は続く (1)

空がしだいに夜の闇色に染まっていく。オレは開け放った窓の枠に腰をかけてぼんやりとそんな空を眺めていた。階段下の方からねーちゃんの声が聞こえたような気もするけど……まあ、ほっといいだろう。多分、あの白ネコと格闘しているんだろうな。二階のオレの部屋にまで聞こえてくるなんて。やっぱり、うるさいのはねーちゃんの方だ。

部屋は相変わらず荒れきったままだ。プリント海もガラクタ堤防も健在。いい加減片づけをしないとイケないのでは、と思うけど、どうも身が入らない。

頭の動きが妙に鈍い。ちゃんと動くための歯車がいくつか欠けてるみたいだ。それもこれも、ぜーんぶあの白ネコが変な謎を残して行ったせいだ。

「海人おー？ 晩飯だぞ つて、何してんだ？」

唐突に耳に転がり込んできた、オレの名前を呼ぶ低くて落ち着きのある声。オレはびっくりして窓枠からずり落ちそうになりながら、声の方に振り向いた。

オレの部屋の扉が開いて、長身の男が頭を覗かせる。白髪の混じり始めたストレートの黒髪がオレとそっくりだ。(もっとも、オレには白髪は混じって無いが)

「ななななんだ、父さんか……」

微妙に上ずった声でオレは応えた。なんだか、秘密のヘソクリをバレル寸前で隠したような気分だ。

「『なんだ』とは何だ」

静かな夜の空みたいなお父さんの黒い瞳がオレの部屋を一通り見回す。と、みるみるお父さんの眉間にしわが寄っていく。ちょうど、イ

ヤな臭いをかいだ時みたいな顔だ。

「海人、お前この部屋」

「あ、ああ、今片づけ中なんだ」

オレはいつも以上にボソボソと言った。ねーちゃんが聞いてたら、また「ブツブツ言っくな！」とか言うんだろっくな。

「明日、下宿先に荷物を引っ越すのに……間に合うのか？」

「間に合わせるよ」

オレは足元のプリント海を見つめながら父さんに言い返した。父さんの同情したようなため息が聞こえる。我ながら情けなくなってきたなあ。

「そうだ、晩飯に呼びに来たんだった。もうみんな食べ始めているかもしれないぞ、早く来いよ」

そう言っつて父さんは去った。

荒れきった部屋に一人になったオレ。昼間は暖かかった春の風は、日が暮れてすっかり涼しい風になっている。どこか冷たく感じるくらいだ。

とにかく、晩飯にしよう。腹が減っては戦はできぬ。この部屋との戦いはまだまだ続きそうだし。

「やっぱりマグロはおいしいわ！」

「美波、少し食べすぎじゃないのか？」

「いーのよお父さん。食卓は戦場よ？ あ、イカだ！ これもおいしーのよね」

ちょうどオレが台所兼居間の扉に手をかけた時だ。ねーちゃんの明るい大声が聞こえる。

「ってか、「おいしい」ってどういうこと？ ねーちゃん、オレを待たずに先に食べているのか？ オレ、まだ席についてないんだけど？」

「……これはオレの晩御飯の消滅の危機に等しい。」

「くそっ！」

オレは大慌てで扉を開けた。

「あ、海人！ 遅いわよ」

夕食の席に着いたオレをねーちゃんが箸でピツと指した。まるで責めてるみたいだ。

「何度呼んでも来ないなんて！ 私の声、聞こえなかったの？」

「……あの声はオレを呼んでいたのか」

「え？ なんて言った？ ボソボソ言わないでよ」

「……なんでもない」

「ハイハイ、今日の夕飯はお刺身よー」

母さんはいつもより大きな声を出して仲裁に入った。母さんのこげ茶色の瞳がオレを見て苦笑いするように細くなった。

母さんは瞳の色と同じこげ茶色のゆるいウエーブのかかった髪を一つに束ねている。長さこそ違うけど、ねーちゃんの今の髪とそっくりだ。ちなみに、母さんのこの髪は地毛。「学生時代は『髪の色は校則違反だ』って先生に怒られたのよ。黒色に染めたら何も言わなくなったけど」と軽い調子で笑って語ったことがあった。

まあ、オレやねーちゃんは父さん譲りの黒髪だったから、母さんみたいな苦労はしていない。でも、ねーちゃんは高校を卒業して大学に進学してから 髪を染めても怒られなくなったら すぐに今の茶色いウエーブヘアにした。まるで、母さんとおそろいのような髪に。

こついの、無い物ねだりっていうのかな。それとも、憧れなのかも。

オレは食卓に目を向け 思わずため息をもらした。

食卓の真ん中に鎮座する今晚のメインディッシュ。母さんの言葉通りならば、お刺身……だったんだろう。

もう魚は一切れも無いけどね！ ツマ（大根の千切り）しか残ってないんだけどね！

じゃあ、今晚のオレの晩ご飯の献立は、大根の千切り、白ご飯、

わかめスープなのか？　ねーちゃんはマグロを食べてるのに？

「なあ、ねーちゃん。オレの刺身は……？」

オレはかすれた声でひっそりと問いかけた。

「甘いわよ海人。食卓は戦場よ？」

フフンと不敵に笑うねーちゃん。そのセリフは、非情な宣告にも等しい。このねーちゃんには、かわいい弟に夕食のメインディッシュを残してやるうという気遣いはないのか。ワサビの塊を投げつけてやりたくなる。

でも、オレはその衝動をかろうじて抑えた。代わりに、負け惜しみするように大根を口に頬張った。シャリシャリとした食感。味気ない水っぽさ。ワサビが無くて涙ぐんでくる。こんなのはっかり食ってるから、オレはヒョロイままなんだ。ねーちゃんの鬼！

2、腹が減っても戦は続く

(2)

うちの食卓では主に女性陣が会話の中心だ。オレも父さんもあまり口数は多くない。だから自然に母さんとねーちゃんが話をして、オレと父さんが聞き役といった形になる。

「そういえば、お母さん。海人ってば野良猫を家に入れてたのよ」

「え？ 野良猫？」

母さんが眉をひそめる。ねーちゃんめ、余計な告げ口を。母さんは動物が苦手なのだ。母さん、そんな顔すると小じわが増えるよ。

「だから、入れてないって。アイツがかつてに部屋に出たんだよ！」

オレは猛然と反論した。しょぼい晩御飯に加え濡れ衣まで被されるなんてあんまりだ。

話を聞いていた父さんがのんびりと口を開いた。

「『部屋に出た』って……ネコだろ？ その言い方じゃ、まるでゴキブリみたいだなあ」

「父さん、食事中」

母さんが鋭く突っこんだ。ハイハイと面白そうに父さんが笑う。反省度ゼロだ。

「とにかく、オレは野良猫なんて拾ってない」

「そういえば、海人は昔、よく家で野良猫を飼おうとしてたわねー」
ねーちゃんが懐かしそうに言った。ダメだ。この人、オレの話を完全にスルーしている。オレは気持ちを切り替えて、少し気になっていたことを尋ねることにした。

「そういえば、ねーちゃん。あのネコどこに行ったんだ？」

「外に逃げて行ったわ。ホントは飼い主を探るか、保健所に連れてくべきなのかなあって思ったんだけど、その開いている窓から逃

げちゃって」

そう言ってねーちゃんはリビングの窓を指差した。

「そうか……」

喋るネコが街に放たれたとなったら……きっと大騒ぎになるよな。しかもあの白ネコ、オレの名前を知っていたよな。もしアイツが街中でオレの名前をペラペラ喋りでもしたら……まずいことになるなにか？ でも待てよ。ねーちゃんはアイツが喋っていることにすら気づいてなかったよな。ということは、別段心配するようなことは起こらない……のか？

「なに、ぼーつとしてんのよ。やっぱり気になるんだ？」

ねーちゃんがからかうように目を細めた。

「うっさい」

オレはぴしやりと言い返すと猛然と大根をほおばる。一口頬張って、強がったことを後悔した。やっぱり水っぽくてまずかった。

大根の千切りも皿の上から消え、ねーちゃんも父さんも自室に戻っていった。でもオレはまだ食卓に居座ってた。健全な男子たるオレの夕御飯が、大根の千切りと、白ご飯と、わかめスープだなんて、あんまりだ。ねーちゃんがいなくなった今、冷蔵庫を漁ってみるのもありだろう。多分、冷凍タコ焼きぐらいあるんじゃないかな……。そんなはかない希望にすぎるなんて、オレ、情けないな……。

いささか惨めな気持ちになりながら冷蔵庫のドアに手をかける。

その時、横から声がかかった

「ほら海人」

母さんだ。オレに差し出したその手にあるのは、小皿に盛った刺身だ。

「これ、夕飯の……？」

「おねーちゃんには内緒よ？」

母さんのこげ茶色の瞳が明るく輝いている。まるでサプライズのプレゼントを差し出しているみたいだ。

「あ、ありがとう」

ボソボソとお礼を言って小皿を受け取る。母さんはくつくと笑いかみ殺した。

「な、なに笑ってんだよ」

突っかかるように言うと、母さんは何でもないわ、と手を振った。

「うちは生存競争が厳しいからね」

「……ったく、早く一人暮らしがしたいよ」

オレは小声で文句を言いながら刺身をほおばった。うん、ウマイ。やっぱり刺身はマグロだな。

「へえー、一人暮らし楽しみなんだ」

唐突に盛大な水音がした。どうやら母さんが洗い物を開始したらしい。

「楽しみってほどでもないけどさ……まあ、少なくとも、一人暮らしらゆつくり食べれるだろ？　ねーちゃんに先に食べられることもないし」

派手な水音に負けないように声を張り上げてオレが言う。

確かにねえと母さんはからかうように笑った。

「でも……こんなふうにみんなでごはん食べるのも、少なくなるのかしらねえ」

それは水音にかき消されてしまいそうな小さい声だった。オレに言ったというより、思わず漏らしたつぶやきに等しいだろう。

でも、もしコレがオレへの問いかけだとしたら？

オレの答えは「そりゃそうだろ」だ。オレは三日後には下宿暮らしを始めるし、ねーちゃんだってそのうち自立するか結婚するかし（嫁の貰い手がいれば、だが）、家を出るかもしれない。

だけど、おれは「そうだ」なんて言えなかった。母さんのその声が、その表情が、なんだかいつもより細くて寂しげに聞こえたせいだ。

「……まあ、すぐ帰ってこれるさ。下宿っても隣の県だし」

少し考えて、オレはそう返事をした。

「そうね。電車で2時間あれば行けるからねえ」

母さんは笑った。多分、洗い物の水しぶきのせいだろう。母さんの眼がいつもよりキラキラしてたように見えたのは。

3、隣の海は闇色 (1)

「海人おー、こっちは片付いたぞ」

流しの方から父さんの間延びした声が聞こえる。

「あー……うん、そう」

オレは中途半端な返事をしながら、洋服の入った段ボール箱をそのままクローゼットの中に放り込んだ。本当はちゃんと服をケースに入れて整理するべきなんだろうが……こうした方が時間短縮になる。

あたふたとクローゼットの扉を閉めたと同時に、父さんが近づいてきた。

「やつぱり、家具付きの部屋だから引越しも楽でいいな」

一通り部屋の中を眺めて父さんが言う。どうやらオレのずさんな片付け方法はバレてないらしい。オレはこっそり安堵のため息をついた。

「なかなかいい部屋じゃないか」

父さんが満足そうにうなずいている。

「いい部屋、ね……」

ボソリと呟き、オレは下宿先の部屋を見回した。

たった一部屋の狭い住まい。実家のオレの部屋に、申し訳程度の玄関と、簡単な水周りのスペースが増設されたぐらいの広さだ。まあ、学生アパートの広さなんてこんなもんか。

部屋には、ちらほらと小さめな家具が置いてある。冷たく光る白い冷蔵庫。ちよつと固そうなベッド。どれもこれも、見慣れない家具ばかりだ。家具付きの部屋を借りたのだから、これは当然の光景だといえる。でも、目の前にあるこの見慣れない家具を、これからオレが使っていくのだと考えると、妙な違和感がある。

実家から持ってきた家具は、食卓代わりの小机や小さい本棚ぐら
いだ。見慣れた小さな家具たちは、こじやれた部屋の中で所在なさ
げに浮いて見えた。

「オレ、これからここに一人暮らしするんだよな……」

オレは鼻をこすりながら、ぼそりとつぶやいた。妙に部屋の匂い
が気になる。他人の家に来たような気分だ。

「何を今さら」

独り言のつもりだったのに、父さんには聞こえていたらしい。あ
けっぴろげに笑われてしまった。おい、父さん。そんなに笑うこと
ないだろ。

どうやらオレのこぼした文句は、父さんには聞こえなかつたらし
い。

「海人！ こつち来てみる！」

オレの不機嫌オーラをまるで無視した、父さんの明るいう声。窓際
で、父さんが手招きしている。その弾んだ声も笑顔も、まるで宝物
を見つけた子供みたいだ。

オレは鼻をこすりながら、のそのそと父さんの隣へ行く。

「何？」

「海人、お前の大学が見えるぞ」

オレはチラリと窓を眺めた。父さんが指差す先で、大学の建物の、
とんがった屋根が茜色に輝いている。目がチクチクするぐらい眩し
くて、オレはすぐ目を逸らした。

「こんなに大学と近いなんていいじゃないか。ますますいいアパー
トだなあ」

勤務先もこれぐらい近いといいのに、なんてぼやいている父さん
は、当たりくじでも引いたみたいに喜んでいる。自分が住むわけじ
やないのに、オレより嬉しそうだ。他の人の物って無条件でよく見
えるものなんだろう。隣の芝は青いつてわけか。

「どうだ、海人。部屋の片づけも終わったし、ついでに大学に寄っ
てみるか？」

「いいよ……どうせこれから毎日みるつてのに。それより、もう家に帰ろう」

父さんの眉が垂れて、あからさまに残念そうに唸った。

「ほんとに家に帰るのか？ 父さんはともかく、海人はこのままここに泊ることもできるだろ？」

「帰るよ。明日はクラスの同窓会があるんだ。そもそも、今日引越した理由は、父さんの仕事の都合に合わせただけなんだし」

「そうか……」

父さんはもう一度だけ大学を眺めた。夕日に照らされた父さんの横顔には、温かい茜色の光と黒々とした影が同居していた。

オレは唐突に思った。父さんはオレよりずっと歳をとってる人間なのだ、と。父さんに文句いったり、ブツブツ言ったりしてるけど、なんだか急に父さんが遠くにいる気がした。

「父さん……？」

小さくてか細いオレの呼び掛け。相手がねーちゃんなら独り言として、完全無視されていたかも。それでも父さんにはちゃんと届いていたみたいだ。

「よし、じゃ海人。帰るか」

振り向いてオレの目を見る父さんの笑顔は、茜色に輝いて見えた。

3、隣の海は闇色 (2)

空は茜色から群青色に変わっていた。気の早い星がちらほらと顔をのぞかせている。

オレと父さんの乗った車は、下宿先の街 美原市みはらを後にして、実家のある街 久楽市くらくを目指して、上り坂の太い道路を走っていた。

「下宿先、いい街じゃないか」

父さんは運転しながら、助手席のオレに話しかける。オレは窓から美原の街を眺めていた。街の灯りがキラキラしてまぶしい。光の1粒1粒がそれぞれ勝手に自己主張しているみたいだ。

「ここがオレの住む街、か。」

「父さんはこの街のどこがいいんだ？」

「海が近いとこ」

即答だった。確かに、この街は山を隔ててすぐに海がある。まったく、釣り好きの父さんらしい答えだ。父さん、特に海釣りが好きだもんね。

「海人。お前はどうか？ この街、好きか？」

父さんが問いかけると同時に、車はトンネルの中に突入した。車内で流れていたラジオが急に途切れて耳障りな音を立てる。

「オレは別に。父さんほどの釣り好きじゃないし」

「そういえば、最近は釣りに行く暇もなかったな。今度、美原みはらに来るときは釣りの準備も持っていこうか」

「それでそのまま下宿先のアパートで泊まるってか？」

「お。いいな、そのプラン」

父さんはまんざらでもなさそうだ。でも、オレにはあまり嬉しくないプランだぞ、それ。釣り帰りの父さんがその日の収穫を引っ提げて、下宿先のアパートへやってくる……。友達には絶対見られた

くない光景だ。それに、部屋が魚臭くなりそうじゃないか？ 魚料理は好きだけど、部屋の匂いにするほど好きってわけじゃないのだ。どうやって反論するべきか考えていると、トンネルが終わった。ラジオがぎこちなく喋り始める。

「おお、海だぞ海人！」

道路は下り坂にさしかかっていた。父さんに促されるまま目をあげると、フロントガラスいっぱい広がる海が目に入る。

「やっぱり海はいいなあ」

感慨深げな父さん。オレは思わず父さんの顔を見た。父さんはこの海がいいというのか？

「オレ、この海はあんまり好きじゃない」

そうつぶやいたオレの口調は自分が思っていたより頑なだった。ちよつど聞き分けのない子供のような、強情な口調。

「海人……？」

運転中の父さんが、一瞬だけこつちを向いた。父さんの黒い瞳の中に驚いたような、気遣うような、光が見える。

「えっと、オレはこの海より地元の 久楽の海の方がいいんだよ。ほら、オレが小さい時、よく父さんと釣りに行っただろ……あの海の方が好きだ」

「そうか？ でも、美原の海も久楽の海も、同じ1つの海だぞ。つながつているからな」

それはそうだろう。地図で見たら、久楽の街も美原の街も同じ海に面しているのだから。

「だけど、オレは」

「オレは久楽の海の方がいい」

小さく、それでいて強情な反論がオレの口からこぼれた。父さんに聞こえたかどうかはわからない。でも、父さんは何も言わなかった。

オレはもう1度窓の外に目を向けた。

2度目に見ても、車窓から見える美原の海は闇色だった。日の暮

れた空よりも、暗くて深い闇色の海。ずっと見ていたら飲み込まれてしまいそうになる。

何かを振り払うかのようにオレは眼を閉じた。こんな色の海なんて見たくない。

頭の隅で父さんの言葉がよみがえった。

『美原の海も久楽の海も同じ1つの海だぞ。つながっているからな』

「……違う」

オレはこっさり反論した。

眼の前に広がる闇色の美原の海。オレの記憶の中の久楽の海。やっぱり違う。小さい時、よく父さんと一緒に釣りをした久楽の海とは違う。明るく輝きながら、ずっと遠くまで広がっていた久楽の海とは全然違う。

たとえ同じ海でも、たとえ海はつながっていても

「オレには別の海にみえたんだ」

オレには闇色に見える美原の海を、父さんは「いいなあ」と言った。

父さんの眼に、この海は何色に見えたんだろう？

4、3匹寄れば睡眠の邪魔

オレの安眠を妨害したのは、腹への1撃だった。おへそに向かつて頭突きされたような重い1撃。その衝撃は、掛け布団があったおかげでいくらか鈍くなっていたものの、オレの安眠をぶち壊すには十分だった。

「ぐふっ！」

オレの口からくぐもった悲鳴が飛び出す。

「オイ、タマ！」

どこからか低い声が聞こえる。聞き覚えのある、エラそうな口調。だれか知らんが、オレを「タマ」って呼ぶなよ。それ、小学校の時のあだ名なんだ。オレはもう大学生になるんだぞ？

「タマ　いい加減目を覚ませっ！」

オレにだけ聞こえるように潜めた声が、辛抱強く呼びかけている。

「……んだよお……？」

オレはノロノロと瞼を持ちあげる。目に入ったのは、静かな暗闇と実家の部屋の見慣れた天井。

そして、オレの腹の上に乗っかっている見慣れない影が1つ。大きさは両腕で抱えられそうなくらいだ。ずしりとした重さと生き物の温かさが、掛け布団越しに伝わってくる。オレの安眠を妨害した犯人はコイツだな。

部屋が暗くて、よく見えない。オレは枕元にある照明のリモコンを手探りで探し出す。

スイッチオン。天井でパツと白い明かりが弾けて、目の前が光でいっぱいになる。チクチクする光に目を擦りながらオレは上半身を起こした。

腹の上にあったのは1匹の白ネコだった。初雪のように真っ白でや

わらかくてサラサラしている毛。すばしっこそうなスラリとした体。いたずらっ子みたいなキラキラした瞳。細長いシツポが別の生き物みたいにひよこひよこ動いている。

この白ネコ、見覚えがある。たしか……

「……お前、一昨日の喋るネコか？」

「お、やっと思いだしたか」

白ネコは当たり前のように喋った。寝起き状態のオレよりずっと滑舌がいい。

「……ダメだ。昨日の引越して疲れたのかな、オレ。寝ぼけてこんなファンタジーな夢をー」

「夢かどうか確かめてやるのか？」

言うなり、オレの目の前に白ネコの前足が突きつけられる。かわいらしい肉球　なんて思う間もなく、前足の先から鋭い爪が飛び出した。

オレの眠気は一気に吹き飛んだ。背筋が瞬間凍結する。なんて物騒な目覚め。このままじゃ、流血騒ぎだ。

「イヤ、いい！　夢じゃないのはわかったから！」

「わかればいい」

白ネコは前足を下ろす。ひとまず流血事件は回避できたみたいだ。へろへろのため息と一緒に、オレの全身の力が抜けおちる。人間を脅すなんて、とんでもないネコだ。どんな躰をされているんだ？

家の中は静まりかえっている。家族はみんな寝静まっているらしい。それじゃあ今は何時だ？　白ネコに腹の上から降りてもらい、オレは枕もとの時計を乱暴につかんだ。

朝4時。ふざけてる。こんな早起きする必要なんてない。今日の同窓会だってお昼に集合なのだから、あと4時間は寝ていられるのに。いくら我慢強いオレでも、イライラの限界ってものがある。

「オイ白ネコ。今何時だと思っ」

「私の名前は『シロネコ』ではない」

白ネコはオレを正面から見据えてバシリと言った。オレが喋って

いるのにお構いなしか。

「タマ、私が昨日言ったこと覚えているか？」

「……はあ？」

「名前だ、名前！ 『私の名前を言ってみる』と言ったのだ！ 覚えてないのか？」

白ネコのシツポの先が、じれったそうにくねくねと動いている。

「オレ、お前の名前なんか知らんぞ」

「いいから、言ってみろ」

そう言われても困る。オレは昨日まで、喋るネコなんて見たことも聞いたことも無かった。ましてこの白ネコの名前なんか知るわけが無い。そもそもこの白ネコ、名前を名乗っていないじゃないか。

「……わからねーよ。第一、なんでお前はオレの名前を知ってたんだ？」

このオレのセリフで、白ネコの我慢も限界をむかえたらしい。白ネコの瞳に宿った鋭い光がオレを射抜いた。

「ふざけるな！ お前が私のことを知らないはずがない！ 下手なウソをつくくな！」

「お、おい、騒ぐなって」

白ネコをなだめつつ、すばやくドアを確認した。あんまりうるさいと、ねーちゃんが隣の部屋から怒鳴りこんで来そうだ。そうなら、ますます面倒なことになる。

「まさかタマ、お前、私を忘れたのか？」

「たのむから静かにしてくれって。ねーちゃんが起きてしまうだろう。最後の一言が効いたのか、白ネコは急に口をつぐんだ。

チャンスとばかりに、オレは小さく咳払いをした。さて、今度はこっちが話の主導権を握る番だ。

「えー……そもそもお前、一体何者なんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080y/>

人生《ストーリー》は終わらないっ！ 1

2012年1月14日09時24分発行